

《推量》と《説明》 —テキストにおける「にちがいない」をともなう文の機能—

宮崎 和人

1. はじめに

《推量》については諸説があるが、ほとんどが助動詞論か、せいぜい文のレベルにとどまっていて、認識的モダリティーと文のテキスト構成的機能の相関という視点をもつものは非常に少ない。その数少ないもののなかから、ここでは、奥田（1984）の見解を引こう。

述語に「だろう」をともなうおしはかりの文は、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をよりどころに、そこから想像あるいは思考によってあらたにひきだされる出来事をえがきだしている。¹

《おしはかり》という間接的な認識にとって、その根拠あるいは前提をつとめる事実なり判断は、文のかたちで段落のなかにあたえられていることもある。あわせ文の部分としての文のなかにあたえられていることもある。段落のなかにあたえられていないばあいには、ひろい範囲でコンテキストのなかにもとめなければならないだろう。よみ手の常識にまかされていることもある。

しかし、述語が「のだろう」をともなって、おしはかりの文が説明的にはたらくとき、おしはかりの根拠をつとめる事実あるいは判断は、かなり忠実に段落のなかにあたえられている。この種の段落では、一方には先行する文にえがかれている出来事の理由なり原因、あるいは意味をあきらかにする説明の過程があって、他方にはその、先行する文にえがかれている出来事を根拠におしはかりの想像なり思考の過程があるが、これらの、ふたつの、方向のことなる過程は同時に進行している。つまり、ことの原因なり理由、あるいは意味をあきらかにするために、説明がもとめられるわけだが、その原因、理由、意味をつきとめるため、おしはかりの過程が進行する。このとき、先行する記述的な文にえがかれている出来事は、おしはかりのための根拠をつとめる。ここでは、《おしはかりの構造》と《説明の構造》とがひとつにもつれあっている。²

ところで、「らしい」も、広い意味で《推量》の表現形式とみられることがあるが、これは「だろう」とは認識的な意味が大きく異なる。そのことを、奥田（1985）は次のように述べている。

¹ 奥田（1984）、p.59。なお、類似の指摘は、寺村秀夫にもみられる。「その推量の根拠は、ふつうは自分のこれまでの経験、知識の総合である」（寺村（1984）、p.227）。これはまた、モダリティーの類型論的研究である、Palmer（2001）のAssumptiveの規定にもかさなる（後述）。

² 奥田（1984）、p.59-60。

ここでの《らしさ》とは、現象（動作あるいは状態）の部分、側面、あるいは特徴である。ある現象にならず同伴する、もうひとつの現象である。この《らしさ》が認識する人間にとって《きざし、気配、まえばれ、痕跡》としてあらわれてきて、それを土台に全体としての現象がおしはかれる。ところで、助動詞の「らしい」は《らしさ》のあることだけをかたっていて、それが具体的にはどのような現象であるかということとはかたらない。とにかく、そこには《らしさ》をとおしてうけとられた動作・状態がのべられているのである。「らしい」をともなうおしはかりの文が、「だろう」をともなうおしはかりの文とことなるのは、まずこの点においてである。³

そして、《らしさ》が具体的にはどのような現象なのであるか、さしだす必要のあるときには、「らしい」をともなう文のあとさきに、この現象をえがきだしている文が配置される。このばあい、《らしさ》を具体的にえがきだす文は、「らしい」をともなう文にとっては、おしはかりの根拠をつとめるようになる。つまり、そこには《おしはかり》の構造が成立するのである。⁴

2. 《おしはかりの構造》《説明の構造》と「だろう」「らしい」

《推量》をあらわす文とその《根拠》をさしだす文とのシntagマティカルな関係は、《おしはかりの構造》と呼ばれている。述語に「だろう」をともなう文も、「らしい」をともなう文も、さらに、「のだろう」をともなう文も、おしはかりの根拠をつとめる文がその前後に配置されているとき、そこには《おしはかりの構造》が成立する。

…ひろがった懐中電燈の間を、さらに幾つかの、黒い人影が埋めていた。おまけに、あの、穴のように見える道端の暗いかたちは、たしかにオート三輪である。かりに、一度はきりぬけてみても、すぐに後から、追いつかれてしまうだろう。(砂の女)⁵

急に、犬は視線をそらせ、うなじを下げると、何事もなかったように、のっそり立去って行った。どうやらおれの殺気に負けたらしい。野犬をにらみ負かすとは、おれの気魄も、ちょっとしたものだ。(砂の女)

女は顔をそむけ、ひきつったような表情をうかべた。がっかりしたのだろう。まったく、田舎の人間は、飾り気がない。彼は、くすぐったいような気持で、しきりと唇をなめまわした。(砂の女)

だが、この三つのおしはかりの文とその根拠をつとめる文がつくりだす構造は、同じではない。奥田は、このことを次のように説明する。

³ 奥田 (1985)、p.59。

⁴ 奥田 (1985)、p.59。

⁵ 本稿でとりあげる用例は、すべて小説の地の文から収集したものである。

おおくのばあい、「らしい」とおきかえられるのは、「だろう」ではなく、「のだろう」である。このことから、「らしい」をともなうおしはかりの文は、「のだろう」をともなうおしはかりの文とおなじように、説明的にはたらいっている、と考えることができる。

しかし、「らしい」をともなうおしはかりの文と「だろう」をともなうおしはかりの文とは、その意味がひとしい、とはいえない。なぜなら、これらの文でつくられている《おしはかりの構造》は、ことなっているからである。《おしはかりの構造》はかならずしも《らしさの構造》ではない。おしはかりの根拠をつとめる出来事は、かならずしも《らしさ》である必要はない。⁶

すなわち、それぞれがつくりだす構造は、次のようである。

「だろう」をともなう文 : 《おしはかりの構造》⁷

「のだろう」をともなう文 : 《おしはかりの構造》《説明の構造》

「らしい」をともなう文 : 《おしはかり(らしさ)の構造》《説明の構造》

「らしい」と「のだろう」が多くの例で置き換え可能であることは、すでによく知られているが、次の例はそうではない。

むろん、危険がないとは断言できない。それに、あと三十分もすれば、彼等の態度が急変しないともかぎらないのである。たとえば、例の、県の役人のこともあるわけだ。最初、部落の老人は、彼をその役人かと思ひ違えて、ひどい警戒の色を示したものである。役人の調査が、近く予定されていたのだろう。(砂の女)

この例では、《おしはかりの構造》が成立しているが、「のだろう」を「らしい」に置き換えることはできない。ここには《らしさ》が存在していないからである。

さらに、《説明》の表現手段にも違いがある。「のだろう」をともなう文は、「のだ」という《説明》のかたちをとることで、《説明》としてはたらくのであるが、「らしい」をともなう文では、《おしはかり(らしさ)の構造》のなかに成立する、根拠の文とおしはかりの文との論理的な関係から、《説明》

⁶ 奥田 (1985)、p.60-61。

⁷ 「だろう」をともなう文の場合、《おしはかりの構造》は、二つの思考過程のなかに成立する。一つは、「彼は甘いのが好きだ。ケーキをあげたらよろこぶだろう」のように、《一般的な命題から具体的な出来事へ》、もう一つは、「彼にケーキをあげたらとてもよろこんだ。きっと甘党だろう」のように、《具体的な出来事から一般的な命題へ》。奥田は、前者を《想像》、後者を《判断》と呼んで区別している(なお、文学作品にしきりにみられる、具体から具体への転位にも、一般的な命題の媒介があり、それが表現されていないだけであるという)。「らしい」をともなう文の場合、《根拠》は具体的な現象であるから、《一般的な命題から具体的な出来事へ》というパターンはありえず、《具体から具体》か《具体から一般》になる。

のはたらきが派生している。「のだろう」をともなう文の場合、《説明されの文》がかなり忠実にテキスト内に存在するのに対して、「らしい」はそうではないのは、前者では、《説明》の意味が形態論的に明示され、積極的に《説明の構造》がつくりだされるが、後者では、《説明の構造》は、《おしはかり（らしさ）の構造》を前提として、そこにかさなりあっている、という違いによる。

「らしい」をともなう文において、《おしはかり（らしさ）の構造》と《説明の構造》がかさなりあう事情を《説明》の側を探ってみよう。そのために、奥田による《説明》の概念規定を参照する。

さしあたって、物や出来事をめぐって、これらの内部のおくふかくにかくされている、直接的な経験ではとらえることのできない、本質的な特徴をあきらかにすることが《説明》であると、規定しておこう。また、物のあいだの相互作用のなかから、原因・結果の関係のような、法則的なむすびつきをとりだすことが《説明》であると、ひとまず規定しておこう。みて、きいて、わかることなら、説明をもとめる必要はない。本質的な特徴や法則的なむすびつきが物や出来事の内部にかくれていて、それらが直接的な経験ではとらえることができないから、人は説明をもとめるのである。説明することによって、そこに存在している物や出来事が、なぜそのようなすがたに存在しているのか、ということの根拠が明らかになる。⁸

この奥田の規定を受け、佐藤里美は、「物や出来事の本質的な特徴をあきらかにすること」が《説明》であるとすれば、これは、名詞述語文の《一般的な意味》の規定とかさなるとし、名詞述語文は、「のだ」をともなわなくても、《説明》としてはたらくことを多数の用例によって論証している。

…テキストのなかではたすみずからの役わりを、「のだ」という形態論的なかたちのなかに明示しているということで、「のだ」による《説明の文》が、物や出来事の本質を明らかにしつつ、そのテキストのなかでの論理的なむすびつきを、《文法的な意味》のなかに固定させているとすれば、名詞述語文は、《対象的な意味》のなかに物や出来事の本質をさしだすことを基本的な使命としつつ、その論理的なむすびつきを、文の配置のし方のなかに、テキストのくみため方のなかに表現するにとどめているのである。⁹

このように、名詞述語文の《対象的な意味》が、本質的な特徴を明らかにするという側面において、《説明》の概念とかさなりあうとすれば、「らしい」をともなう文の場合には、《らしさ》から《らしさをもたらししているもの（原因や本質）》をおしはかるという《おしはかり（らしさ）の構造》が、原因・結果の関係のような法則的なむすびつきをとりだすという側面において、《説明の構造》とかさなりあうと考えられるのである。

⁸ 奥田（1990）、p.177。

⁹ 佐藤（2001）、p.70。

3. 「にちがない」をともなう文の場合

「にちがない」をともなう文もまた、おしはかりの文の一種であることは間違いない¹⁰。奥田は、それをおしはかりの《たしかさ》のカテゴリーのなかに位置づける。

…おしはかりの文にえがきだされる出来事は、はなし手にとって確信的なものであったり、うたがわしいものであったりする。おしはかりの文には、「だろう」をともなうものばかりではなく、「……にちがない」、「……かもしれない」、「……かしら」のような、ことなるかたちの文がいくつかあって、《たしかさ》それとも確信度のちがいを表現している事実をみれば、このことがよくわかる。¹¹

「にちがない」と「だろう」の違いが《たしかさ》の明示の有無のみであり¹²、両者の認識的な意味のタイプに違いがないとすれば、《おしはかりの構造》や《説明の構造》への「にちがない」のかかわりかたは、「だろう」のそれと同じであると予想されるだろう。だが、実際はそうではないのである。

確かに、「だろう」をともなうおしはかりの文に対して、《たしかさ》を指定したものが「にちがない」をともなう文であるというように考えてさしつかえないと思わせる例は多数ある。

…ふつうネズミの被害は一町歩当り八〇匹の密度が限度とされているのだが、俊介の計算によれば、今年の春は一町歩当り約一五〇匹という数に達するのではないかと思われた。しかも冬ごもりの間にササの実を食いつくした彼らは飢えて見境がつかなくなっているのだ。木をかじるにしてもなまやさしいことではすまないはずだ。彼らの牙は樹皮から木質部まで、ほとんど素裸にちかく幹を剥いでしまうにちがない。

(パニック)

それには深いわけがある。東作くんは、自分を栄光の絶頂から引きずりおとしたあの匿名の投書の差出人をつきとめようと考えているのである。投書をするぐらいの人間であるから、しばしば手紙を書くにちがない。それならば、郵便物の集配人をやっているならば、あの匿名主の筆蹟にまためぐりあえぬともかぎらない。

(ブンとフン)

内藤が四十五年に大阪で韓国のボクサーを相手に闘った試合ということになれば、それは十九連勝目の試合となった崔成申戦に違いない。(一瞬の夏)

¹⁰ 「にちがない」には、おしはかりにはなっていない、「間違いがない」というもとの意味での使用もみられる。「彼等の姉の夫なのだから、私は義兄にちがない。けれども、六人きょうだいの末弟で、しかも上の五人とは年齢がかけはなれていて、きょうだいの味というものを知らずに育った私には、義兄さんと呼ばれることがもの珍しく、彼等ときょうだい付き合いをすることに、私は新鮮なよろこびを感じていた」(帰郷)

¹¹ 奥田 (1984)、p.62。

¹² 「だろう」をともなうおしはかりの文は、話し手の立場からの確信度を何ら語らない。それは「きっと」「たぶん」等の副詞が表現する。

これらの「にちがいない」を「だろう」に置き換えても、《たしかさ》が不問になるだけである。成立しているのは、一般的な知識にもとづく《おしはかりの構造》のみで、《説明の構造》はみいだされない。述語動詞が非過去形をとる文には、こうした例が多くみられる。

ところが、述語動詞が過去形をとる場合では、状況は一変する。多くの例が《説明の構造》のなかにあらわれてくるのである。

「いったい、あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです」

「あなただと？」

影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたとといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。（孤高の人）

この例の「にちがいない」をともなう文が《説明の構造》のなかにあることは、「にちがいない」を「だろう」に置き換えることができず、「のだろう」にする必要があることから明らかであろう。また、《おしはかりの構造》のなかにあることも明らかである。おしはかりの根拠をつとめる文は、すぐ前に配置されている。さらに、ここで成り立っているのは、単なる《おしはかりの構造》ではなく、《おしはかり（らしさ）の構造》である。「影村はむっとしたような顔でいった」という文は、《らしさ》をえがきだすことを通して、《おしはかりの根拠》としてはたらいっている。実際、この例の「にちがいない」を「らしい」に置き換えてもまったく問題がない。

《おしはかり（らしさ）の構造》のなかにある「にちがいない」の例をいくつかあげておく。ここでは、《きざし、気配、まえばれ、痕跡》が感性的な経験にとらえられている。

「一カ月も延びたのか……。コンディションの作り方が難しいね。大変だな」

「ええ、でも、それだけ余分にトレーニングができるんだから」

確実に内藤の内部で変化するものがあつたに違いない。受話器の向こうには、いつまでも大人になりきれなかった五年前の内藤ではなく、一個の男としての内藤がいた。（一瞬の夏）

天野兵馬が、大治郎の顔を見て、

「あつ……」

と、叫んだ。

関の旅籠の朝を、おもい出したにちがいない。（剣客商売）

僕も枕木が燃えるのは不思議だと思っていた。歩いて行くにつれ、ところどころの枕木がちよろちよろと燃えたり煙を出したりして、電柱の先や中ほどからも煙を出している。敵は油脂焼夷弾というのを落したに違いない。（黒い雨）

宵祭ではあり十三夜ではあるので、家中表座敷へ揃うた時、母も奥から起きてきた。母は一通り二人の余

り遅かった事を咎めて深くは言わなかったけれど、常とは全く違っていた。何か思っているらしく、少しも打解けない。これまでは口には小言を言うても、心中に疑いはなかったのだが、今夜は口には余り言わないが、心では十分に二人に疑いを起したに違いない。(野菊の墓)

名詞述語文、形容詞述語文の例も、あげておく。

その時、吟子の後ろから太い声をした。振り返ると頬から鼻下へ髭を連ねた大柄な男が立っている。まだ三十前のようなだが背広を着たところはかなりの高官に違いない。吟子が思ったとおりの男を見ると守衛達は一斉に頭を下げた。(花埋み)

風の勢いが次第に取りつつあるようだった。波は相変わらず荒れ狂っていたが前ほどのことはなかった。それでも僕等二人を乗せた小舟は、気味の悪い蠕動を繰返した。空は少しずつ霽れて来た。東の空全体に一種の薄明りがみなぎっているところを見ると、月の出ももう間近に違いない。(草の花)

ただし、こうした例は、《説明》としてはたらく「にちがいない」をともなう文の一部にすぎない。《らしさ》をともなわない《説明》の例(後述)のほうが数ははるかに多い。これらを「らしい」に匹敵するものとみるのは誤りであって、「のだろう」と等価であることを確認しておけば十分なのかもしれない。

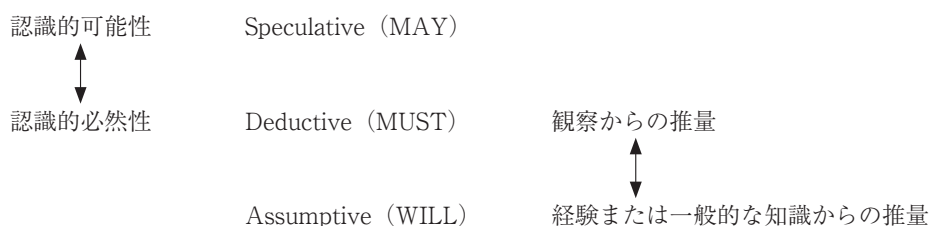
この問題に関連して、Palmer (2001) に興味深い記述がある。Palmerは、類型論的な観点から、さまざまな言語に共通してみられる、認識的モダリティーのカテゴリーとして、Speculative (不確実)、Deductive (推定)、Assumptive (推測) の三つを認め、英語のシステムについて、次のように説明する。

There are, it may be argued, two not entirely compatible contrasts in the English system. The first involves the strength of the conclusion, and distinguishes between what 'may' be and what 'must' be, i.e., between what is epistemically possible and what is epistemically necessary. This distinguishes Speculative (MAY) and Deductive (MUST). The second distinguishes between an inference from observation and an inference from experience or general knowledge, i.e., between Deductive (MUST) and Assumptive (WILL). In many languages it seems that one of these contrasts is either the only contrast in an epistemic system or, at least, the more important contrast. Not surprisingly, the single contrast between inference from observation and inference from experience is mostly found in languages with evidential systems.¹³

つまり、英語のシステムを二重の二項対立ととらえ、MUSTに二側面の意味特徴を認めているので

¹³ Palmer (2001)、p.25。

ある¹⁴。



日本語でも、二重の二項対立が成立しているとみてよい。《認識的可能性》と《認識的必然性》は「かもしれない」と「にちがいない」によって区別され、《観察からの推量》と《経験または一般的な知識からの推量》は「らしい」と「だろう」によって区別されると、一応は考えてよいだろう。英語では、MUSTが二つの対立を仲介しているのに対して、日本語では、二つの対立が独立しているということである。言い換えれば、日本語には、Deductiveのカテゴリーに、「らしい」と「にちがいない」という二つの形式があるということであり、両者が接近することは、十分にありうることである。

では、《説明の構造》のなかにある「にちがいない」をともなう文の全体をみていこう。用例の分類にあたっては、奥田（1990）が記述した、「のだ」をともなう《説明の文》と《説明されの文》とのむすびつきのタイプの体系を参考にしている。

《説明の文》と《説明されの文》とのあいだに因果関係がみられる例が多数ある。原因、理由、動機、根拠としての出来事をさしだすことが、《説明》としてはたらく「にちがいない」をともなう文の中心的な機能であると考えられる。

まずは、そのなかから、「にちがいない」をともなう文が結果としての出来事をさしだす《説明されの文》に対して、その《原因》としての出来事をさしだしている場合をとりあげる。《原因》には、内的なもの（前の二例）と外的なもの（あとの二例）がある。

二カ月前の友子の手紙では最近体が弱って手足に軽いむくみが来ていた、と書いてあった。

それは友子が依瀬まで行って母に会った時のことだから、もう三カ月前のことらしかった。その後むくみ

¹⁴ 澤田（2012）によると、認識的なmustには、「現存性条件」（その事柄は現存的でなければならない（すなわち、それは、現実世界の中の過去又は現在の事柄でなければならない、（単純）未来のwillで表される類の未来の事柄であってはならない）が課せられるとし、この条件は、「認識的mustの場合、話し手は、現時点で入手可能な直接的証拠に基づいて、ある事柄を推量する。…その事柄が単純未来のwillで表される類の未来の状況である場合、話し手は、発話時点ではその事柄を推量するための直接的証拠を入手してはいない。それゆえ、話し手は、認識的mustを用いてその事柄を推量することはできない」ということを意味していると説明している。この状況は、日本語の「らしい」と共通である。工藤（2006）では、「するらしい」の多くは、「〈発言内容を証拠とする推定〉か、〈伝聞〉である。これは、〈知覚した具体的現象〉を証拠とするだけでは、〈未来の事象〉〈恒常的特徴〉を推定しにくいことを示していると思われる」と指摘している。認識的モダリティとテンスの相関の実態については、宮崎（2012）の調査を参照されたい。

でも強くなったのであろうか。むくみだとしたら腎臓か、心臓の病に違いない。腎臓だとすると腎性の昏睡にでもおち入ったのだろうか、急に悪くなったところをみると心臓なのかもしれない。(花理み)

——自分で思っているより、ずっと疲れていたに違いない。伸子はソファで、いつしか眠りに落ちていた。

(女社長に乾杯！)

仕方がないので他の始末に取りかかった。食器、夜具、蚊帳、靴など、泉水に沈めようと庭に持ち出して、水面を見ると御先祖様や神札を納めた白い布袋が浮いている。部屋のなかから吹きとばされたに違いない。それを拾って背負袋に納め、庭に出していたものを手当たり次第に泉水に投げこんで、防空壕にも入れて出入口へ煉瓦塀の欠片を積み重ねた。すると、隣の新田さんのうちで助けを求めて叫ぶのが聞えて来た。(黒い雨)

女は、よほど氣勢をそがれたらしく、行動に対してばかりでなく、言葉に対しても、ひどく従順だった。敵意どころか、抗議の色さえ示そうとしない。おそらく一種の、催眠状態にあるのだろう。われながら、あまり手際がよかったとは思わず、それがかえって暴力的な効果をあらわし、女の抵抗力をうばってしまったにちがいない。(砂の女)

次は、《説明されの文》にさしだされた何らかの動作、状態をし手にとらせる、し手の論理や心理的な要因を《理由》として《説明の文》がさしだしている例である。こうした例も大変多い。いずれも、「のだろう」に置き換えることができるだろう。

何年前か、内藤はインドネシアで暮らしていたことがある。その時、リアという名の響きを耳に留めることがあったのだろう。そして、その名の意味が幸子であるのを知って、さらに強く印象づけられたにちがいない。子供が生まれ、女の子だと知って、理重と名づけた。自分の娘に幸子という名を与えようとした内藤の気持は、彼の母親が自分の息子に純一とつけた気持と、相通じるところがあったのかもしれない。(一瞬の夏)

「十六年前に御別れた佐々木です」こう云った。余程驚いたらしい。富にとって僕の名は殆ど凶事を意味していたに違いない。何とも返事をしない。僕は是非一度会って話したいと云った。まだ黙っている。僕も黙って了った。両方で黙っている時間が一寸あった。(佐々木の場合)

あたりがほの白くなってから始めて気づいたのだが、舟に同乗した三人の番人はいずれも太い棍棒を足もとにおいていた。もし司祭が逃亡の気配でも見せれば容赦なく海に投げこむよう命令されていたに違いない。

(沈黙)

汗を掌でぬぐいながら通辞は駕籠をとめ簾をあげた。外に出るといつの間にか夕暮の光があかあかと照り、牢舎で彼の世話をしてくれる番人がいた。やはり道中、自分の逃亡を怖れてついてきたにちがいない。(沈黙)

登美子はうつ向いて煙草に火をつけた。その顔には男に対する不信がありありと浮んで見えた。女にとって、自分がみごもった子を男から否定されるということは、それまでの二人のあいだのすべての愛が否定されることであつたに違いない。賢一郎は自分の罪を感じていた。しかし今が大事な時だった。この罪の感覚を、眼をつぶって踏越えて行かない限り、自分には破滅が来る。それは解りきつたことだった。みすみす破滅に

おちいって行くか、それともこの罪を敢えて踏越えて行くか、二つに一つだった。(青春の蹉跎)

私が引け目を感じると同時に、ナオミも引け目を感じたに違いありません。綺羅子が席へ交ってから、ナオミはさっきの傲慢にも似ず、冷やかすどころか俄かにしんと黙ってしまって、一座はしらけ渡りました。

(痴人の愛)

次にあげる例でも、《説明の文》と《説明されの文》のあいだに理由・結果の関係が成り立っている。たとえば、最初の例では、「後藤が聞いたら顔をしかめることがおしはかれる」という《理由》によって、「星が手紙の話を後藤新平にしなかった」という《結果》になっている。

星は一段と勇気づけられた。だが、この手紙の話は、後藤新平にはしなかった。初代総裁として満鉄を育てた後藤が聞いたら、顔をしかめるにちがいない。(人民は弱し 官吏は強し)

駅にきけばわかるに違いない。彼は息せく思いで札幌駅に向った。(点と線)

だから、この街に住む無数の人間は、ことごとく江藤の敵だった。味方はひとりも居ない。その敵の大群から、彼は漠然とした圧力を感じていた。しかしこれらの敵は、敵そのものが分裂している。森の中の木立のように、彼等はみな孤立している。彼等が孤立しているということが、江藤にとって一つの救いだった。そこに伐り込んで行ける隙があるに違いない。(青春の蹉跎)

伸子の耳には入れたくなかった。万が一、昌也が犯人などということになれば、伸子には大ショックに違いない。これは一つ確かめてからにしくはない。(女社長に乾杯！)

それは当然といえども遠からぬ思考であった。高柳四郎は仙台の近在の酒造りの家の出である。彼が属目するに足る医師であること、実家が決して繁栄していないこと、年齢は十四ほど違うが、いずれも基一郎の目鼻にかなう事柄といえた。それに基一郎は外科医も一人は身内にかかえておきたかったのである。脳病科にもいずれは外科手術を要する時代がくるにちがいない。(楡家の人びと)

だが、こうした例は、前にとりあげた例とは違って、「のだから」に置き換えることはできない。ここで成り立っているのは、《説明の構造》のみであって、《おしはかりの構造》は成立していないのである。ここに配置されているのは、《説明され》と《説明》であって、《おしはかりの根拠》と《おしはかり》ではない。ここでは、《し手の動作、状態》をさしだす文と《し手の判断》をさしだす文をならべることによって、《説明的なむすびつき》がつくられているのである¹⁵。だから、これらの「にちがいない」は、「のだから」ではなく、「だろう」に置き換わる。あるいは、「のだ」をもちいて《説明》であることを明示しようとすれば、「にちがいないのだ」のかたちをとることになる。

¹⁵ 「テキストの構成要素としての文にとって、《論理的なむすびつき》は義務的であって、その表現を〈文をならべる〉というし方ですますこともあるとすれば、「のだ」のつかない、はだかのかたちの文が、すでに《説明》としてはたらくことがあるのもうぜんのことである」(佐藤 (2001)、p.70)

《理由》の一種とも考えられるが、《説明されの文》では動作をさしだし、《説明の文》では、その動作のなかにある心理的な側面を、《動機》や《目的》としてさしだしている例がある。いずれも、《おしはかりの構造》も成立している。

武者小路は、

「彼は駅に着いた時もニコニコしてはいるが、殆どものを言わない。リップエンに会わせ、レーダーに紹介したが、その応対はテキパキして相手に好意を持たせるが、自分から進んで話題を見出そうとは決してしない。確かにこの点は米内に似ている。然し米内よりは余程鋭角の感じがした」

と書いている。

ここでこそ山本は、ナチスに言質を取られそうなことは口をつぐんで一切言うまいと思っていたにちがいない。(山本五十六)

彼には解っていた。康子の手紙は二人に関する一番大事な問題を、わざと避けている。そして彼の返事もまた当り障りのない書き方で、大事な問題からわざと距離を置いているのだった。おそらく康子は賢一郎との間に一定の間隔を保ちながら、しかし或る程度の接触をも保ちながら、様子を見ようとしているに違いない。つまり賢一郎が司法試験に合格するかどうか。それを見定めた上で自分の態度をきめようとしているのではないかと思われた。(青春の蹉跎)

二メートルと離れない所に、彼等のスキイが雪に突き刺してあった。それは男が捜索者のための目印に立てて置いたものに違いない。彼は死を覚悟していたのだ。(青春の蹉跎)

次は、《説明されの文》が感情をさしだし、《説明の文》がその感情の《源泉》となる出来事をさしだしている例である。ここでも、《おしはかりの構造》は存在している。

おそらくその徹吉の口調には、何かにつけ引合に出される養父が得意にしていたラジウム風呂を、つい必要以上に侮蔑するひびきがこめられていたにちがいない。そのためかたくな父親崇拜から遁れられぬ龍子の心はひどく傷つけられた。(楡家の人びと)

ところが、次のような例では、《説明の文》は、感情の《源泉》となる出来事ではなく、判断をさしだしていて、《おしはかりの構造》が成立していない。したがって、置き換えられるのは、「のだらう」ではなく、「だらう」あるいは「にちがいないのだ」である。

じつを言うと、彼はおきぬのいることに、あるあわい喜びを感じていたのだ。おきぬの顔を、朝ばん見られることもうれしいし、それにまた今までのように、何かにつけて、きっと自分の身かたになってくれるにちがいない。いや、それ以上のことさえ、吾一はほのかに期待していたのだ。(路傍の石)

「にちがいない」をともなう《説明の文》が、《説明されの文》にいいあらわされた判断、評価、態度に対する《根拠》となる判断をさしだしている例がある。《おしはかりの構造》が成立しているとしても、「のだろう」のときは、《説明の構造》との照応関係が反転している。《説明》であることを明示するならば、「のだろう」ではなく、「にちがいないのだ」にする必要がある。ただし、《説明の文》が《説明されの文》を条件づけていることにはかわりはない。

彼は自分のエゴイズムを知っていた。しかしだからと言って、それが直ちに悪い事とは言いきれない。謂わば一種の正当防衛であるとも考えられる。女性関係の一つ一つについて、そのたびごとに相手に対して誠実を尽していたら、男の世界は内部的に崩壊するに違いない。現代は生存競争の域をはなれて、ほとんど戦争状態にちかづいている。生残って自分を栄えさせる為には、或る程度のエゴイズムはむしろ正当であると考えなくてはならない。(青春の蹉跎)

しかしそれこそ女の最大の策略であったかも知れない。現状を維持して三年も経過すれば、女は三年の実績を身につけてしまう。それから後に男の方から別れを求めたとすれば、女は三年の実績を楯にとって膨大な要求をもち出すことができるに違いない。現状維持こそ最も巧みな謀略であり、男にとっては一番陥り易い罠であった。(青春の蹉跎)

酒や煙草をなぜ、目の敵にする親がいるのだろう、と太郎は思う。それは、子供たちに、それらをおいしく思わせるためだろうか。それならよくわかる。隠れて飲む酒は、大っぴらに口にする酒よりうまいに違いない。(太郎物語・高校編)

どこへ厄介になるにせよ、東京から送った相当量の荷物を置く場所のある部屋を貰わねばならない。しかし、と杯を受けながら徹吉は思った。そのときにこそ自分がけちけちと病的な精神をもって貯めこんだあの罐詰類が役に立つであろう。金よりも何よりも、あの高価だった罐詰は一疎開者の土産物としてこのうえないものにちがいない。(楡家の人びと)

次は、《説明の文》が、《説明されの文》にさしだされた出来事の使命、目的をあきらかにする、《意義づけ》の例である。《おしはかりの構造》のなかにある。

これらの小屋で共通していることは、入口に杉や檜の枯葉や青草を蓄えていることであった。蚊遣りの材料に違いない。農家で肥料にする灰を取るやりかたで、枯葉に火をつけて燃えあがらないように厚く青草を被せ、夜もすがら燻らせて置くのだろう。(黒い雨)

以上のように、「にちがいない」をともなう文が《説明の文》としてはたらくとき、《説明されの文》がおしはかりの《根拠》をさしだしていて、そこに《おしはかりの構造》が成立している場合と、《理由》《源泉》の一部や《判断の根拠》のように、それが成立していない場合がある。しかし、条件づけ・

条件づけられの関係が存在していて¹⁶、条件づける出来事が《説明の文》に、条件づけられる出来事が《説明されの文》にさしだされている点では共通である。このような論理の運びになっているものを、奥田は、《つけたし的な説明》と呼んでいる。

これとは逆に、《説明の文》が条件づけられる出来事をさしだしている場合があり、これは《ひきだし的な説明》と呼ばれている。次は、《説明されの文》が《理由》をさしだし、「にちがいない」をとまう《説明の文》が《結果》をさしだしている例である。

山本はどうも、あまり気が進まなかったようである。

米内光政がドイツを信用しなかったように、山本も、ドイツ、少なくともナチ政権下のドイツには、強い不信の念をいだいていた。

だからこそ、リップントロップは余計に山本をベルリンに立寄らせる必要を感じていたにちがいない。

(山本五十六)

焚火を燃やした男がどの方向に行ったかはすぐ推測することができます。なぜならば道は一つしかない。彼はこの尾根づたいに私が今きた方向と反対側にむかって歩いていったにちがいない。空を見あげると濁った雲のなかに白い太陽が光り、その太陽の光をうけながらさきほどとは別の鳥の群れが、嘎れた声で鳴きつづけていました。(沈黙)

——安田としては、じっさい、《まりも》で到着するのだから、河西をホームに來させるのが効果的である。それをさせなかったのは、飛行機には、天候や機材の関係で二時間も三時間も遅れることがあるからだ。それだけ遅れたら、彼は札幌駅から小樽に逆行し、そこで《まりも》をキャッチするというような芸当は不可能になる。《まりも》に乗れなかったらホームに迎えに出た河西にわざわざその汽車で來なかったことを証明するようなものだ。

思慮深い安田は、その辺まで計算に入れて「待合室で待て」という電報を打ったに違いない。(点と線)

これらの例には、《おしはかりの構造》のみが成立していて、《説明の構造》は成立していないのではないかという疑いがある。もしそうなら、これらの「にちがいない」は「だろう」に置き換わるはずだが、無理である。《説明》の形態論的なかたち、つまり「のだろう」を選ぶ必要がある。

《つけたし的な説明》と《ひきだし的な説明》は、論理の運びかたの違いであるから、書き手が何をあきらかにしたいのかということに応じて、選択される。「私はダイエットをしている。やせたいのだ。」と「私はやせたい。それで、ダイエットをしているのだ。」とは、論理的なアクセントが違うだけである。うえにあげた《ひきだし的な説明》の例も、《つけたし的な説明》に変換することがで

¹⁶ 奥田(1990)では、《具体化・精密化・いいかえ》《思考の对象的な内容》など、条件づけ・条件づけられの関係のみられない《説明》のタイプもとりあげられているが、本稿では、条件づけ・条件づけられの関係のみられるものだけをとりあげることにする。

きる。たとえば、二つめの例は、「彼はこの尾根づたいに私が今きた方向と反対側にむかって歩いていったにちがいない。道は一つしかないのだ。」となって、新しく条件づけとなった《説明の文》に「のだ」があらわれる。

次に、《つけたし的な説明》の《判断の根拠》の場合と論理の運びが逆の場合をとりあげる。対象の認知を手がかりとして未知の事実をひきだす、《発見的な判断》である。かなり前にあげた、《おしはかり（らしさ）の構造》の例も、ここに所属させてよいだろう。

三人の警官が宇野家に現われたのは、行助が成城警察署に電話をした直後だった。修一郎がベンツを運転して家を出てから十分と経っていなかった。三人のうち一人は私服だった。

「矢部行助という学生がいますか？」

と迎えにでた行助に年輩の警官が訊いた。

「矢部？ ……ええ、僕が矢部行助です」

行助は、咄嗟にすべてを理解した。修一郎は、女中と女中の息子に刺された、と警官に告げたにちがいない。

(冬の旅)

妖女伝、筆者の名字号をしるさず、序跋年記もないが、本文の記事から推して、おそらく嘉永末年ごろのものか、美濃罫紙にて墨附十七丁、すこぶる達筆の細字をもってカナまじりに書かれている。ただし、達筆のわりに、文章は妙といえない。ときには論孟なんぞの章句を引いて時世をなげく口ぶりもあり、ときには平談俗語をはさんで稗史まがいの手つきも見せながら、この漢文くずしはどうも生硬である。学殖はあっても、筆をとることに慣れないひとが書いたものにちがいない。(喜寿童女)

最後に、《説明の文》に一般的な命題（本質的な特徴や法則的な関係）がさしだされ、《説明される文》にその具体的なあらわれである出来事がさしだされる場合をみる。奥田（1990）では、これをさらに、つけたし的である場合とひきだし的である場合にわけ、前者を《本質的な特徴づけ》、後者を《一般化の判断》と呼んでいる¹⁷。それぞれ、一例ずつあげておく。

プールの中での康子は、泳ぎを楽しむというよりは、自分の体を他人から見られることを楽しんでいるのではないかと思われた。水にはいつている時間よりも、水のふちを意味もなく歩きまわったり、藤椅子に坐って冷たい飲物を飲んだりしている時間の方が多かった。毎週プールに来るというのも、その事の楽しみのためかも知れなかった。孤独な悦楽。そしておそらく女にとっては本能的な虚栄心でもあるに違いない。

(青春の蹉跎)

義昭の美濃入りの日は朝からの快晴で、城下のひとびとは、

「公方晴れじゃ」

¹⁷ 奥田によると、これは、論理の運びが演繹的であるか帰納的であるかという違いでもある。

と騒ぎ、この快晴を奇瑞のように言い囃した。なにしろ美濃の国に義昭ほどの貴人が来ること自体がほとんど奇跡的なことであり、人々はただそれを思うだけで常軌をうしなうほどに陽気になっていた。この田舎では、公方といえばほとんど神に近いような存在だった。

信長も例外ではない。

この朝、この男はいつものように暁闇の刻限から馬場に出たが、一時間ばかりのあいだ、鞭をあげつづけてまるで狂気したように馬を駈けまわらせた。

(公方が来る)

この一事が、信長ほどの不愛想者を、ここまで奇妙にさせた。これほど弾みきったところをみると、この時期での信長は、やはり一介の田舎者であったにちがいない。(国盗り物語)

4. おわりに

読者は、おそらく、ここまで「のにちがいない」というかたちに言及していないことを訝しく思われることだろう。筆者は、もちろん、用例のなかに「のにちがいない」の存在を確認している。次のような例では、「のにちがいない」をともなう文が《説明》としてはたらいっている。

敗戦の衝撃、民族的悲哀などというものから、金閣は超絶していた。もしくは超絶を装っていた。きのうまでの金閣はこうではなかった。とうとう空襲に焼かれなかったこと、今日からのちはもうその惧れないこと、このことが金閣をして、再び、「昔から自分はここに居り、未来永劫ここに居るだろう」という表情を、取戻させたのにちがいない。(金閣寺)

だが、「だろう」と「のだろう」の関係と同じような関係を「にちがいない」と「のにちがいない」のあいだに認めることはできない。まず、頻度がまったく違う。「だろう」と「のだろう」は頻度がほぼ同等であるが、「のにちがいない」は「にちがいない」に比べて圧倒的に低頻度である¹⁸。また、「だろう」と「のだろう」の対立はかなり厳格であって、《説明の文》に「だろう」を使うことは基本的には許されないが(名詞述語文を除く)、本稿でもみたように、「にちがいない」は、さかんに《説明の文》にも使用されている。「のにちがいない」は、「にちがいない」に対する《説明》の形態論的なかたちとして、地位を確立しているわけではまったくないのである。

佐藤が明らかにしているように、本質的な特徴をあきらかにする名詞述語文は、「のだ」をともなわずとも、《説明の文》としてはたらきうる。「にちがいない」もまた、「のだ」をともなわずに、《説明》としてはたらくならば、その場合の《説明》の形式とは、モダリティーなのであろう。

《説明》がモダリティーであることを、奥田は次のように説明している。

¹⁸ 詳しくは、宮崎(2012)を参照。

ここで確実にいえることは、《説明の文》においては、はなし手は、すでにおこった、いまおこっている、そしてこれからおこる出来事を確認して、さしだしているということである。ところが、《説明の文》におけるはなし手の《確認》は、それでおわったわけではない。いちど確認した出来事を《説明されの文》にさしだされる出来事との関係のなかに配置して、それが《条件づけ》であることをもういちど確認しているのである。したがって、《説明の文》においては、二重の意味での《確認》がおこなわれている、ということになる。…

事実を確認するということで、はなし手は一度モーダルな意味を文にわたす。この文をはなし手が論理的なむすびつきのなかに配置するとき、すでに確認している出来事は、原因とか理由、動機とか根拠、というような論理的なカテゴリーのなかにおさめられる。こうして、二重の意味での《確認》あるいは《判断》が成立する。はじめの《確認》あるいは《判断》が、現実の世界にたいする、はなし手のモーダルな態度であるとするれば、二番目の《確認》あるいは《判断》は、文の対象的な内容にたいする、はなし手の論理的な態度である。モダリティーにおける二重構造の、ひとつのあらわれである。¹⁹

「にちがいない」をともなう文の《モーダルな意味》が／間違いのないこと、確かなことであるという話し手の判断／であるとするれば、この判断は、法則的なむすびつきのなかに出来事をとらえるという論理的な態度とむすびついて、《認識論的な必然性》のモダリティーをかたちづくっているのである。

参考文献

- 大鹿薫久 (1995) 「本体把握—「らしい」の説—」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院
奥田靖雄 (1984) 「おしはかり (一)」『日本語学』3-12
奥田靖雄 (1985) 「おしはかり (二)」『日本語学』4-2
奥田靖雄 (1990) 「説明 (その1) —のだ、のである、のです—」『ことばの科学4』むぎ書房
工藤真由美 (2006) 「文の対象的内容・モダリティー・テンポラリティーの相関性をめぐって—「らしい」と「ようだ」—」『ことばの科学11』むぎ書房
佐藤里美 (2001) 「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現と《説明》—」『ことばの科学10』むぎ書房
澤田治美 (2012) 「日英語の認識的・証拠的モダリティと因果性」『ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ：事例研究』ひつじ書房
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
野田春美 (2012) 「「のだ」の意味とモダリティ」『ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ：事例研究』ひつじ書房
宮崎和人 (2012) 「認識的モダリティーとテンスの相関性—小説の調査から—」『日本研究』51、韓国外国語大学日本研究所
Palmer, Frank R. (2001) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.

付記 本稿は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(C)による研究成果の一部である。

¹⁹ 奥田 (1990)、p.196-197。